墓参の後（48・11・15クェゼリン日本人墓地にて）

マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
郵便番号 154
世田谷区野沢3—11—3
電話 東京（421）3614
振替口座東京93487番
編集兼発行人　浮田信家

つしんで新春の御祝詞を申しあげます

玉砕から三十一回目の新春を迎えました。それは永い永い三十一年でございました。玉砕後一年半たったとき、空襲で焼け出されましたけれど、その当時は、まだ戦争中という緊張が、体を支えてくれました。ところがその空襲のあと二週間で敗戦を知らされたときは、立ち上る勇気も無くなる程がっくりいたしました。日本国中物も心も乏しくなった時私は枕上に立った夫の最期を想ってわが身に鞭をうちそれ以来無我夢中に頑張り続けました。

三十一年の間には様々な出来事がございました。でもその間動かない願いは夫の最期を遂げた土を踏むまでは死んではならないということでございました。それが私達の遺族会のお力で、今年こそは、その願いを叶えさせて戴けそうで、大いに張切って元旦の朝を迎えました。

会員章ありがとうございました。紺碧の海に燦然と輝く、南十字星をあらわされたデザイン、これこそマーシャル方面遺族会々員章としてふさわしい、本当に素晴らしいバッヂでございます。浮田様のお書きになられた文章を幾度も幾度も繰り返し精読していると、まだ見ぬ、南十字星や紺碧の海が見えてくるようでございます。亡き多くの方々もあの世からどんなにか喜んで下さっていることと信じます。

戴いた会員章は、亡夫が今にして思えばクェゼリンに向け出発直前にカメラにおさまったもの（今でも三十歳の）の前に飾っています。

今年の墓参を祈りつつ年頭の御挨拶まで。

一月元

小住　龍

目　次

新春の願い……小住　龍(1)
大洋丸乗組員の最期
……清　藤太郎(2)
……三鍋　富徳(2)
クェゼリン環礁今日この頃
……クェゼリン島の一住民(3)
母の一念……山田　信子(4)
母の形見から……富田　みつ(4)
宿願の墓参遂に叶えらる
……浮田　信家(5)
本年二月六日の行事報告
……事　務　局(6)
二月六・七日行事雑感
……事務局編(6)
優しい息子夫婦
タクシーの運転手
懐かし！　副碑の小石
直会旅行
感　謝
昭和49年度決算報告……(7)
昭和50年度予算……(7)
寄附者芳名……(8)
事務局だより……(12)

大洋丸乗組員の最期

船長夫人下釜春江様宛

大洋漁業㈱トロール漁業部
部長　清藤太郎

大洋丸が昭和19年1月30日の戦闘で全員戦死されて約三ヶ年がたちました。誠に御同情に堪えない次第であり、心から英霊の御冥福をお祈りいたします。

扨て大洋丸乗組員は全員（32名）戦死されたことになっておりましたが、去る12月4日突然2名の生存者がアメリカから送還されてまいりました。この尊い生存者から、大洋丸と乗組員30名の壮烈な最期を聞くことが出来ましたので皆様にお知らせ申し上げます。

大洋丸は昭和19年1月31日クェゼリン島碇泊中敵艦隊の攻撃を受けて下釜船長以下数名の負傷者を出し船体も破損し、且つ敵の攻撃は益々激しいので、附近の無人島に乗り上げ上陸致しました。此の間海中に飛び込んだ者が一名おりました（半島人）。上陸後30分ほど後、重傷の下釜船長は遂に戦死されました。

同無人島には海軍掃海艇の乗組員百余名が避難しておりました。之と合流して大洋丸乗組員も同島に避難しておりました所、同年2月6日頃アメリカ水陸両用戦車3台が上陸して来ましたので日本の必勝を信じていた全員は機関銃3基をもって之に猛攻を加えましたが奮戦甲斐なく遂に力尽き2名を除き全員壮烈なる戦死を遂げられたのであります。時に昭和19年2月6日午後一時でありました。

この戦闘で重傷人事不省に陥った三鍋富徳君は戦車に乗せられ捕虜となり、星山源太郎君は3月20日迄同島に生き残り、之が又捕虜となりアメリカ本土に抑留され今日に至り、今般送還された次第であります。

生存者　甲板員　三鍋　富徳君
同　星山源太郎君

右のように戦死の日時と場所とが確認されましたので御知らせ申上げます。

生還者三鍋富徳氏より船長夫人下釜春江様への音信

（昭和21・12・25）

御遺族様からの御希望により記憶に残る当時の状況をお知らせいたします。

詳細の御報告は徒らに皆様の新たな涙をお誘いするばかりとは存じますが一方これをお知らせすることが船長の御霊をお慰めする所以かとも考え書き連ねます。残念ながら小生生来の拙筆、ご立派であった御最期を良く表現出来ませんが真心こめて書きますので御判読お願いいたします。

「昭和19年1月26日目的地クェゼリン島に入港。早速荷役を開始し、昼夜兼行で28日には荷役の全部を終了しました。船団の都合上同島迄一緒に組んで来た秋葉山丸（五〇〇〇トン）と共に船団航行の予定で同島に碇泊しておりましたところ、1月30日早朝敵艦載機数十機来襲し、本島の陸上施設は次々に破壊され、本船も敵機の急降下機銃掃射を数回に亘り受けましたが、船長の適切な指揮の下に行動しましたので一名の負傷もなく済みました。幸い船も航海上必要な要具は異常なく、どうやら内地まで帰られる予定でした。

当日敵は飛行機による連続攻撃をなし、我方僅かに飛行機二機にて終日敵機の爆撃及機銃掃射下にありました。

翌三十一日本船はクェゼリン環礁内のクェジャガリン島の島影に待避しておりましたところ午前9時頃同島の外方に敵機動部隊戦艦巡洋艦を発見敵艦本船に向けて側砲にて砲撃を開始しましたので、本船は全速にてジグザク針路を取り敵の砲撃を避けておりました。此時船長は船橋にあって指揮に当り、他は待避させて、一名の操舵手と共に航送中敵砲弾がブリッヂ（船橋）に命中し船長さんは下腹部と右足に重傷を負われ、遂に職務を執り得ず、死を寸前に次の遺言をなさいました。

遺言

一、自分はもう駄目だ。船の事、船員の事は一等運転士に頼む。

二、自分には子供が二人ある。どうか立派に育てて呉れと伝えて貰い度いと言われて間もなく息を引き取られたのであります。

何と崇高なる御精神、沈着なる方でしょう。最後まで船員の身の上を案ぜられ死んで行かれた事は凡人にはできない立派なご最期でした。

お二人の御子息様が彷彿とし御主人御最期の当時無邪気に乳房を撫でておられたのではないかと想像し、幼なくして父を亡くされた方々の御心境を察するときうたた感慨無量なるものがあります。

祖国が戦勝の暁には後世迄の良き教訓として永えに国民の中に知れ亘った事でございましょうが、日本国民の運命はあまりにも悲惨で、今祖国の敗戦の姿を眼のあたり視て当時の御立派なる最期が残念でなりません。

丁度息を引き取られたのが昭和19年1月31日午前9時半頃かと存じます。被弾の為本船機関部から浸水し始めたので最も近い無人島に船を乗り上げました。この攻撃で船長さんが名誉の戦死、他に多数負傷者を出したので、島に上陸し船長さんを埋葬いたしました。同島で友軍の来援を待ち焦がれました

が、我方の情勢益々悪化し2月6日敵は水陸両用戦車を揚陸し来り、我方は木刀をもって最後の肉弾攻撃決行の海岸線の配置についたのですが、科学兵器の前には、精神力も抗し得ず、敵戦車砲弾の炸裂によって二名を残し全員クェゼリン環礁無人島の露と消え去られました。今敵占領下にあり草葉の蔭に皆様方の御幸福を見守っておられることと想像しております。

クェゼリン環礁今日この頃

クェゼリン島の一住民

昭和50年5月10日

本当に永い間ご無沙汰申し上げてしまいました。何卒お許し下さいませ。

心にかかりながら日々の雑事に追い回されて一日が立ち、果して24時間あるのかと思うほどのあわただしさで、月日が流れてしまいました。

その後お変りなくお過しでいらっしゃいましょうか。当地は今年に入り色々と変化の連続が続いております。

まず昨年11月以来レコード破りのドライシーズンで4月末までに全島乾燥して茶色化し、頑丈な椰子すら駄目になるほどでございました。五月に入りまして待望のレインシーズンに入り目にも鮮かな緑が一度に甦り生き返った思いでございます。米国の政策で本島も大幅な財政引き締めにあい、非常に多数の人々が帰国し、在島員が大分少なくなる予定でございます。

又メモリアルデー（5月26日）が参ります。先月徳原様休暇でハワイにお帰りの折、墓前の造花も大分痛んでいましたので、お願いして菊やハワイのお花、カーネーション等持って帰って頂きました。生花をいつも絶やさずというのが一番でございますが困難であり申訳けないのですが、生花を供えられない間は造花で御辛抱していただくつもりでございます。

セルフィニー様の事も奥様を通じてお願いしてありますが、何分色々と経営上の変更などあり、この上ない御多忙の時なので催促も控えております。

ベトナムの引揚者一時収容の軍命令があり関係者の頭を痛めた事もございました（沙汰止みとなりましたが）

環礁えの原稿送付も心にかけておりますが仲々はかどらず、しばらくお待ち下さいませ。

デビー夫人もイングラム夫人も6月には御帰米でございます。私共も9月末には米本土に引揚げることに致しました。心にかかりますのはどなたに後事をお願いして行こうかしらとその事ばかりでございます。私共も後一、二年と考えておりましたが、本年が帰米の好機と決めたのでございます。まだまだ御供養が十分でない事のみ申しわけなく存じます。

来島以来七年半一日も欠かさず朝夕御供養させて頂きました。最後の出立の日までも心から御供養して帰らせて頂くようにと教会からの御指図も受けております。帰国後も身は離れても御供養は申し上げます。

私は何のお役にもたつ事が出来ませんでしたが必ず親身となって当島と御遺族の連絡をして下さる方が現われることをかたく信じております。

徳原様も大里様も未だ当分の間はいらっしゃる事でございますし御心配はないことと存じます。パトラー夫人、サンバーン夫人も未定でございますが、この10月頃異動があることも考えられます。

色々の事から考えまして、私が島を出ます9月末までに何の変化もなかった場合は一まず後事をパトラー夫人にお願いして行くつもりで居りますが、矢張り一番お力になって頂けるのは徳原様、大里様でございます。その点どうぞおふくみ置き下さいますよう様老姿心まで。

なお前回お問合せのカレンダーの事でございますが、徳原様はどうぞ御心配なくとおっしゃっておられます。もしお心がすまないと御思いでしたら、会の切手代の足しにでもして下さったら何よりとおっしゃっていられます。大変おくれましたがご返事まで。

デビイひで子さまも6月9日おち立で私もしばらく淋しくなりますがメモリアルデーには御一緒に墓参いたすべく話しあっております。年中行事のカーニバルも本年は中止かと思われましたが例年の通りメモリアルデーを最終日として四日間開かれることとなり、その前に又ご挨拶と御礼に墓参のつもりでおります。

遺族会の皆々様と御縁を得まして僅かの間でご座いましたが何のお役にも立ちませず本当に申わけございません。今後御遺族の皆々様の墓参が叶いますのも近いと信じ心から願っております。

噂ではございますが、陸軍の管理から空軍の管理に移るかも知れないとか……いずれに致しましても、日本人は必らず居住致しましょうから何のご心配もございませんでしょう。大変ご返事のおくれましたこと重ねてお詫び申し上げます。

帰米後暇が出来ました折当島の写真集でも焼いてお送りしたいと主人も申して居ります。皆様にどうぞよろしくお伝え下さいませ。

母の一念

山田信子

一昨年十月厚生省の中部太平洋戦歿者遺骨収集団にお供をして行くことになったときである。東京港出港の約一月前、本会々員柏崎の山田信子様から手紙をいただいた。（浮田）

「この度環礁で拝見いたしましたら中部太平洋の島々への遺骨収集に会長が同道下さいますそうで有難うございます。本当にご苦労様でございます。

つきましては次男山田明はウジャエ島で従軍していたのでございます。御想像通り島々におった者は飛行機なく大砲なく、あまつさえ食糧もなく、悲惨の最期皆同じこと明も自決いたしました。（詳しいことは二伸で）

あれから三十年恐らく皆風化いたしたことでしょうが、何かお目に止りましたらお持ち帰り頂きたくお願い申し上げます。多勢の御一行であり、お疲れのところ又お荷物もおありのことと存じますので本当に御迷惑でございましょうがお願い申し上げます」と結んでそのあと二伸として、

「次男明は海軍々医中尉でウジャエ島におりました。空襲のない日は兵隊さんに食べさせる菜の種を蒔いたり、いろいろお世話をしておりましたが、日を逐いだんだん爆撃が烈しくなり、食糧はなし次第に死んでゆきます。少しの菜をカメに入れて大切にして、手当して治療に回ったそうでございますが本人も食べていないので歩くことが困難となり、長い刀を杖にしてやはりあちこちと手当や治療しておりましたが、最後は五人になったそうです。

いよいよ駄目と覚悟して埋めるものは土に埋め、焼くものは焼いて後始末をして五人でボーフラの泳ぐ水で最期の訣れを交わして天皇陛下万歳を唱えて自決しました。先祖代々伝わった名短刀を仕込んだ腰の短剣で、心臓を突き男々しく果ててくれました。

時は19年5月26日朝の4時だったそうです。25才でした。公報は2月6日となっておりますがこの日まで生きておったのでございます。以上のことは私、信仰させて頂いておりますので神様からお聞きいたしました。島々におられた方々は本当に苦労されたのです。どうぞねんごろにお慰め下さいますようお願いします」　（以下浮田）

ウジャエ島というのはクェゼリン環礁の西約150キロにある小さな環礁で昭和17年戦争中は人口150名程度、湿地が多いのでやしの木やパンの木は茂ってはいても島民の食糧がせいぜいで我軍の食糧などは到底補えない島である。私はクェゼリン環礁入港の前々日ウジャエに入港、一泊して出港した。

埋葬場所が上陸場の近くで、美しい砂浜なので収集も深い割に容易であり母堂の手紙通り五体の遺骨を迎えた。

迎えのボートの来るまで佐藤船長と海岸を歩いた。母堂の神からのお告げを語りつつ、母の一念にしばし沈黙が続いた。折から遙かにのぼりかけた月を眺めながら船長の口から、

この果の
　清き月さえ　霞むらむ
君等とこしえに
　ねむれとぞ思う

私はここで集めた海草や貝を写真に

ウジャエ島収骨　中央浮田　その左佐藤船長

母の形見から

福島富田みつ

前略御免下さいませ。今ごろこんな手紙を差上げることは誠に心苦しく存じます。実は母が亡くなりまして、種々荷物の中の書類を整理致しましたら弟の英霊の調査が来ていたことに気付きました。亡くなって大部たちましたが、私も県庁で勤めており落付いて整理する暇もないままに三年もたちましたが、今回職場を辞職しましたので何かと家の中を整理致したら大切な調査の書類が保管されていたのに御返事も差上げずに申しわけなく又英霊も浮ばれずにいるのではないかと思い、おくれましたが勇気を出してペンを取りました。

どうかこの理由を御了解の上遺族会の会員に入れて下さいますようお願い申し上げます。母は83才で亡くなり、息をひきとる迄我が子はどこかの島で生きていてくれると信じていたのでしたが遂にその期待も消えました。

41年の環礁を拝見し、大部年もたちましたが発展され、様々の念願も達成されたと思います。会員に加えて戴ければ、会費その他種々の必要経費もあることと存じますので、お知らせ願えれば幸せと存じます。

結成は10年前とのこと、当時からの会報その他参考になるようなパンフレ

添えて母堂のもとにお届けした。母堂から早速丁寧なお礼状をいただいた。

「マーシャル遺族会の発会式の時、昇殿参拝をさせて戴きました折に、明の御霊に逢えました。話には聞いておりましたが火玉となってあらわれました。本当に感激いたしました。ウジャエ島遺骨収集の詳報など誠にありがとうございました。息子も安心し瞑目できたと厚く御礼申し上げます」

宿願の墓参遂に叶えらる

浮田信家

昭和38年6月本会が呱呱の声をあげたとき、異口同音に迸り出た言葉は、遺骨収集・現地慰霊・建碑の三ツであった。

以来名誉会長朝香元陸軍大将の宮様、顧問石橋湛山元総理大臣御夫妻、そして会長林茂清元陸軍中将の御指導、御鞭韃によって逐次この願望を達成し会員の希望者による現地慰霊碑墓参だけが残った。慰霊碑とはいえ、この地下にはいまなお数千の御遺骨が埋葬してあり、碑の胎内には三万余の霊璽を埋め込んだ墓標である。

能否は別とし環礁21号、22号二回に亘って墓参の希望を募った所37名の方を得た。この外にまだ多数あったが三月末再照会の際已むを得ず取り消された方があってこの数に落付いた。

本会が連絡をはじめた初代司令官フランク・シー・ヒーレー氏、二代ドナルド・ビー・ミラー氏、三代目のフィッシュバック氏、そして現在のアールエル・ラッセル氏、我々には幸せにも揃って理解深い、正義のお人柄で部下の人達に慕われている方々なので本会の実態を承知されたラッセル氏の理解あるお考えで37名の全員参拝可能となったと考える。

行動の概要（五十年八月）

10(日)二二〇〇東京発、パンアメリカン航空便

……日付変更線通過……

10(日)一〇〇〇ホノルル着

午後…アリゾナ記念館弔訪。日本人墓地参拝。ホノルル市街及び郊外観光

夕…徳原御夫妻他招待会食、ホノルル泊

11(月)終日自由行動・ホノルル泊

12(火)〇八一五ホノルル発、コンチネンタル航空便

……日付変更線通過……

13(水)一一二六マジュロ着　自由行動

夕…州知事、州議会議長招待

マジュロ泊

14(木)終日　自由行動　船便あればミレ島弔訪　マジュロ泊

15(金)一二〇五　マジュロ発　コンチネンタル航空便

……ハワイ時間使用地域に入る……

14(木)一二四七　クェゼリン着

司令官礼訪・墓参

墓参後クェゼリン発。

……ハワイ時間使用地域を出る……

15(金)ポナペ島、トラック島に寄港

一六一六過グアム着　グアム泊

16(土)出発迄自由行動

一九一五　グアム発、パンアメリカン航空便

二一四五　東京着

37名という多勢、厳しい特別地域であることは誰よりも知る本会であるので本年一月以来希望者の整理をはじめ三月末名簿資料の照会を各位におくった。これによって英文の希望者名簿を作り五月上旬かねてお世話になるクェゼリンの日系勤務員の方にお届けした。そして5月23日連絡将校J・S・ビーバー氏あて名簿を添え墓参願いを送った。一昨年秋ビーバーさんにお会いしたあと時折お願いをつづけた外前記日系勤務員の方々のご協力があったお蔭で六月九日公文書をもって37名の墓参許可を受領した。同日夕東京並びに近郊の墓参希望者の参集を求め、打合せを行い、即急に準備にかかり、上記スケジュールの完成となった。

ットなどありましたら、そのお代を送金致したいと思いますのでよろしくお願い申します。私も戦争中は従軍しておりまして、北満でノモンハン事変から大東亜戦争と傷病者の看護につくして来たものでございます。この部隊の戦後の会合も二年毎に行われ今年は5月17・18日伊勢で行われ帰宅したばかりでございます。この手紙も、昨年から書いたり、破ったりいたしましたが、今日は思い切って差上げた次第です。

事務所も前の場所ではないのではないかとも思いましたが、思い切って蛎殻町の方へお出ししてみました。

何卒事情お含みの上よろしくお導きのほどお願い申し上げます。なお当時お送り下さった霊璽用紙同封お届け申しますのでよろしくお願い申します。

（福島　富田　ミツ）

昭50・5・27受領

会員の続柄別員数調

本年一月現在会員一、八二九名の続柄別員数を調べて見ました。

	員数	%
親	810	44.3
妻	532	29.1
子	58	3.2
兄弟姉妹	390	21.3
甥姪	5	0.3
叔父叔母	1	0.1
不明	33	1.8
	1,829	100.0

本年二月六日の行事報告

事務局

慰霊祭当日は好天、直会旅行は7日が生憎くの雨天、車窓の眺望に遺憾の点はあったが、昇殿参拝既に十二回目とあって、終始親族、縁家の法事に似たなごやかに故人を偲ぶ、二日間であった。

一、前夜祭

会員の提案による今年からの行事であった。午後5時から九段会館内有明の間で行った。本部から会長外12名、会員48名、夕食を共にしながら故人の想い出が中心となった追想の一夜。特に玉砕寸前転勤された生還者藤沢市の小野実様の体験談を謹聴し、想い出を新たにした。当夜九段会館宿泊者28名。

二、慰霊祭

例年通り受付9時を待てず8時には到着する方もあって受付を始めた。来賓14名、参集会員172名、計186名。

定刻正10時拝殿に昇りお祓を受けた後御本殿に昇殿しての例年通りの慰霊祭は11時には滞りなく終った。今年も神璽、神饌、神酒を戴き、帰宅後の霊前へのお土産もできた。慰霊祭参加のおしらせなく来られた方が50名近くあった。参列の予報ないため、会費がいつまで納ったか調べてないので受付でまごつく場面もあった。本会の慰霊祭は毎年二月六日午前十時と英霊もこの日この時間を待って下さる年中行事の一つとなった。嬉しいことである。

三、定期総会

今年から始めた前夜祭の効果もあって総会に要する時間を縮め得たので、今年は靖国神社参集所で行った。

例により49年度の事業報告と決算報告、50年度の事業計画と予算案を説明し、全会一致で原案通り可決された。

第三議題として新たに

川口市民病院眼科部長
医博　土岐　達雄殿

ジュークボックス・レンタル社
社長　高林　芳夫殿

を幹事に指名する件発表のところ全員賛成、今後特に会務に協力を願うことになった。

以上をもって定期総会を終り、つづいて希望者55名による直会旅行にうつった。

直会旅行は環礁22号10頁の御案内どおり大型バス一台により六日栃木県川治温泉で直会懇談会、宿泊、翌七日は東照宮外日光の観光を行い、全員無事帰京。本年も持寄会費の残金八一五円は寄付金として本会に頂戴したことを附記し参加員に御礼申上げる。

二月六・七日行事雑感

事務局編

◆優しい息子夫婦

同じ戦域に御主人を亡くされたお友達、親・兄妹の皆様、靖国の御霊に捧げ続けた涙の黙禱、苦しみ抜いた三十年、ときには無我夢中で過ぎた歳月は、短かくもあり又随分長かったとも感じました。父親を知らない息子も、いつか在りし日の父の齢を越してしまいました。この間の母の苦労を身近に感じて、今では優しく労ってくれる息子夫婦に頼る幸を感謝しつつ今年も靖国の大鳥居を、晴れ晴れしく、くぐりぬけた私でした。（新潟　渋谷セキノ）

◆タクシーの運転士

「靖国までお願いします」飯田橋で拾ったタクシーに頼んだ。私の新潟弁もわかったらしく走り出した。

「おばさん旦那さんが戦死されてお参りですか」運転士さんは35歳とか。

「ハイ、私は毎年2月6日には思い出深いマーシャル群島玉砕の慰霊祭に来るのです」彼は怪訝な顔で、

「お客さん、そんな慰霊祭が毎年あるのですか」私はやや得意になって、

「ハイ有難いことですヨ。毎年慰霊祭をして下さる遺族会は私のとこだけですヨ。朝香の大宮様はじめマーシャル方面で肉親を失った多くの御遺族のお骨折でここまで育ったのです。」

「僕のお父さんはガダルカナルで苦戦の後戦死されたけど、そんな話は聞いたことなく、僕だって戦争遺児であり待っているんだけどナア」羨やましそうだった。直会旅行にも触れたが、神社に着いたので下車した。

思いなしか淋しそうに去った。走るようにいつもの参集所についたら懐しい顔、顔、顔、九時少し前だった。

（新潟　高橋たつ）

◆懐かし！　副碑の小石

昨年の慰霊祭に参れなかった私は合間を見て宝物遺品館に入り副碑の参拝をした。大変な出来ばえ、私は裏表を何回も繰り返し見入った。私が送った小石がこんなにも美事に磨き上げられ日本列島皆さんの県の仲間に加えられて何か誇らしさと共に、小石にいい知れぬ懐かしさを感じ去り難かった。

（秋田　小室舜司郎）

◆直会旅行

定期総会後直会旅行一行55名はデラックス観光バスに乗り込んだ。発車前にお弁当、お菓子、果物、飲物を配給され幼稚園児さながら、心ウキウキ、楽しさで胸ワクワク。役員方のご苦労をよそに、一年目の再会を喜びあう中にバスは動き出し、若いガイドさんのお話や民謡に耳を傾ける中に川治温泉豪華な柏屋ホテルに到着した。早速お湯に浸り、手足を思い切り伸し乍ら、

厳寒の　温泉につかる　直会かな

（7）頁の下段につづく

第11期決算報告書

（自昭和49年1月1日　至昭和49年12月31日）

収入の部

科目	金額(円)
前期より繰越金	1,080,867
会費収入	
（49年度分）	631,100
（50年度以降分）	394,800
寄附金等	1,289,841
受取利息	91,662
預り金（戦史，旅行費等）	316,800
雑収入	49,060
計	3,854,130

支出の部

科目	金額(円)
慰霊費	157,350
運営費	1,163,713
刊行費	327,965
印刷費	47,390
通信費	49,384
事務所借用費	172,116
振替払込料	32,695
事務用品費	13,115
会議費	20,910
雑費	(注)289,805
副碑製作費	250,000
預り金返済	320,390
（小計）	(2,844,833)
次期へ繰越金	1,009,297
計	3,854,130

（注）うち会員章製作費270,000

財産目録

摘要			金額(円)
資産	現金	手許現金	99,664
	普通預金	富士銀行（祐天寺）	7,128
	普通預金	都民銀行（学芸大学駅前）	586,371
	定期預金	富士銀行（祐天寺）	400,000
	定期預金	都民銀行（学芸大学駅前）	700,000
	定額貯金		500,000
	振替貯金		216,134
負債			0
合計　正味財産（昭和49年12月31日現在）			2,509,297

正味財産の仕訳

現地慰霊碑維持基金特別勘定	1,500,000
次期へ繰越	1,009,297
計	2,509,297

以上監事の監査を経て御報告致します

昭和50年2月6日

第12期（昭和50年度）予算

マーシャル方面遺族会

収入の部

科目	予算(円)
昭和49年度よりの繰越金	1,009,297
会費収入	1,000,000
寄附金等	1,200,000
受取利息	90,000
雑収入	20,000
（当期小計）	(2,310,000)
合計	3,319,297

支出の部

科目	予算(円)
慰霊費	200,000
運営費	1,400,000
刊行費	600,000
印刷費	200,000
通信費	100,000
事務所借用費	210,000
振替払込料	50,000
事務用品費	80,000
会議費	80,000
雑費	20,000
予備費	62,497
（当期小計）	(3,002,497)
預り金返済	316,800
合計	3,319,297

（6）頁下段よりつづく

例年通り直会は楽しく、睦じく、遠く種子ケ島から参加された鎌田さんの大正琴の演奏はこの直会にはかかせないものとなった。

翌朝一同揃ってのお早う、戴きますの朝食も楽しい一時だった。八時半柏屋ホテルに別れを告げ、有名な杉並木を東照宮に向った。雨など物かは日光廟、陽明門、唐門、五重の塔、御水舎等次々に驚くものばかり。御水舎では十二本の御影石の柱により添い乍ら渾々と流れ出る霊水に、肉親が最後に欲しかったのは、と英霊に思いを馳せた。東照宮朱塗りの回廊にも眼を丸くし、最後の薬師堂内大蟠竜の頭の真下で手を拍てば金鈴の妙音がきこえ、御利益ありときき、腹に力をこめ靖国の霊に聞えよかしと二拍手。リーンと耳の底に響いた。雨景を車窓に楽しみ乍ら、途中二人降り三人別れ午後5時九段会館前で来年を約束して解散した。

（新潟　高林セキ）

◆感謝

バスの中でも、また川治でも和やかな語らいやら隠し芸と夜の更けるのも忘れる楽しさ皆さん同じ境遇にある遺族、こんな和気靄々の喜びを見て御霊もさぞ満足して下さることと思い、またこれが御霊を御慰めすることでもありましょう。尚佐藤幹事様の名司会振りみんなを殊更喜ばせてくれるのです。

（秋田　小室舜司郎）

寄付者芳名

（四四四名）

今期もまた左に掲げますとおり、多数の有志の方からの御寄付をいただきました。厚く御礼申上げます。

ここに載せました会員の方からは、寄付の外に五十年までの会費は全部いただいております。中には先々までの分を前納下さっている方も多数ありますことを申添えます。

環礁を御覧下さってお悦びのお便りをいただいたり、寄付の御送付によって経済的の御協力をお考え下さる実情に接し、会長はじめ役員一同張り合いを感じ努力をつづけております。

（昭和49年11月1日から昭和50年5月31日までに入金の分）

寄付額	芳名（敬称略）		
篤志会員その他			
五〇〇〇	嘉村　栄殿		
〃	藤平　直忠殿		
	◇北海道		
〃	矢崎　寧之殿	母	野戸　タカ
〃	吉原　徳蔵殿	母	宮前ハツエ
三〇〇〇	井上　義夫殿	妻	白山光枝子
〃	石賀　宗美殿	長女	伊藤　フジ
〃	ナウル四高会殿	妻	尾崎　キエ
〃	金子　英郎殿	父	北村弥三郎
〃	篤　名	姉	野沢きくえ
〃	十二　徳次殿	父	沼山長一郎
二〇〇〇	木下　甫殿	兄	本間　藤吉
〃	高野　庄平殿		犬伏　隆
〃	土屋　太郎殿	兄	黒沢　克己
〃	林　幸市殿		
	◇青森県		
一〇〇〇	赤松　光殿	母	蛭田　タケ
〃	石森　義重殿	妻	工藤　ハナ
〃	小林　重雄殿	兄	荒谷美佐男
〃	須藤　伝殿	兄	池田　精治
一〇〇〇	長谷川　博殿	姉	伝福　ちゑ
〃	福田　呉子殿	弟	下川与三郎
〃	松平　永芳殿	妻	雫石　ハツ
		母	田中　ロク
		妻	塚原　ハナ
		妻	本堂　テフ
	◇岩手県		
二〇〇〇		妻	中山　リヨ
	◇宮城県		
三〇〇〇		妻	平形せいこ
一〇〇〇		兄	卯花要一郎
〃			新田富美子
〃		兄	松浦　広雄
五〇〇		妻	松木　孝子
	◇秋田県		
四〇〇〇		母	熊谷サダヨ
二六〇〇		姉	佐藤　敏子
二〇〇〇		妻	畠山　タカ
一二〇〇			小室舜司郎
一〇〇〇		父	佐々木三郎
〃		兄	関山富一郎
〃			相馬　ツギ
〃		母	時田　セキ
	◇山形県		
三五〇〇		妻	渡辺　ミノ
二〇〇〇			赤塚　正美
一〇〇〇		妻	大場美津子
〃		父	鈴木　五一
〃		妻	丹野　アサ
〃		弟	渡部　重雄
	◇福島県		
一〇〇〇〇			
二〇〇〇		妻	関根　チヨ
		妻	吉田　ハル
一〇〇〇		妻	石橋　節子
〃		姉	江尻　キヨ
〃		妻	吉津みどり
	◇茨城県		
一〇〇〇		父	青柳　泰蔵
〃		父	遠峰　軍治
〃			堀江　誠一
〃		母	松塚　みよ
〃		母	宮内　はつ
〃		長男	若狭　明光
	◇栃木県		
三〇〇〇			長男　永井　清
〃		父	増渕利三郎
一〇〇〇		母	植木　モト
〃		母	神山　さく
〃		弟	菊地　彦亘
〃		母	玉田　タケ
五〇〇			菊池　キノ
〃		弟	笹沼　昌雄
〃		弟	淀川　元弘
	◇群馬県		
三〇〇〇		兄	園部　重太
五〇〇		妻	城田ミツエ
〃		母	森　ゆき江
	◇埼玉県		
一〇〇〇〇		妻	柴田　貞子
三〇〇〇		妻	浅野　チカ
二二〇〇		妻	藤田きよせ
一〇〇〇		弟	池田徳太郎
〃		母	大塚　たつ
〃		長男	岡安　宏
〃			鯨井　久八
〃		兄	小暮　長一

一〇〇〇	妻	小谷中せい	五〇〇〇
〃	妻	長谷部なを	〃
〃	妻	福島　レイ	〃

◇千葉県

四〇〇〇	妻	星野千重子	四一四〇
三〇〇〇	母	鈴木　はつ	〃
〃	妻	毛利　しげ	三〇〇〇
二〇〇〇	妹	石川きみ子	〃
〃	父	桑田　忠蔵	〃
〃	妻	津久井艶子	〃
〃	妻	芳賀タツエ	〃
〃	妻	広原　チヨ	〃
一〇〇〇	弟	相川　考夫	二〇〇〇
〃	母	大木　まつ	〃
〃	兄	川名　博夫	〃
〃	妻	鈴木　うめ	〃
〃	弟	高山　貞男	〃
〃	妻	三橋　たか	〃

◇東京都

二〇二〇〇	妻	小泉　文江	〃
一〇〇〇〇	妻	荒井　福栄	一四〇〇
〃	長男	井上　賀雄	一〇〇〇
〃	義兄	浮田　信家	〃
〃	弟	大高　吉郎	〃
〃		黒川　誠	〃
〃	義弟	佐藤　宗丕	〃
〃	弟	高橋　鎮夫	〃
〃	母	橋口キクエ	〃
〃	母	林　春千代	〃
〃	母	水野　はな	〃
九〇〇〇	母	木村　ちよ	〃
五〇〇〇	妻	佐竹　エス	〃
〃	妻	国松ふみ江	〃
一〇〇〇	兄	内海　軍三	〃
〃	弟	土岐　達雄	〃
〃	妻	中田　わか	〃
〃	弟	昼間　楽平	〃
〃	妻	間々田やす	〃
〃	妻	鈴木つな子	〃
〃	妻	岩浪きよ子	〃
〃	妻	浄永　孝	〃
〃	弟	菅沼　昇	〃
〃	妻	佃　喜美	〃
〃		番場　まさ	〃
〃	妹	宇田川ひさ	〃
〃	母	岡本　リヨ	〃
〃	母	加藤きくや	〃
〃		小畑さと子	〃
〃	母	助川与富子	〃
〃	妻	中村喜久代	〃
〃		中村みさを	〃
〃	父	長久保泰三	〃
〃	母	吉田やよい	〃
〃		菅谷喜代子	〃
〃	妻	荒木　しげ	〃
〃	兄	五十嵐孝三	〃
〃	母	石谷　トシ	〃
〃		糸川　カネ	〃
〃	弟	栗原　利雄	〃
〃	父	古賀織之助	〃
〃	妹	山口　裕子	〃
〃	妹	長谷川智子	〃
〃	母	小泉　タケ	〃
〃	兄	小島　章	〃
〃	兄	斎藤耕太郎	〃
〃	母	田中　ハナ	〃

◇神奈川県

一〇〇〇		鳥居ミサヲ	八〇〇〇
〃	妹	小山キミ子	〃
〃	父	長谷川　寛	五〇〇〇
〃		松岡　厳	四〇〇〇
〃	母	増山　キミ	〃
〃	妻	宮崎　イト	二二〇〇
〃	姉	緑川　まき	二〇〇〇
〃	妻	若松　モト	〃
〃	妻	六軒つる子	〃
五〇〇	兄	荻島　佐吉	一〇〇〇
〃		並木　多重	〃
〃	兄	松井　直一	〃
六〇〇〇	妹	吉松　貞子	〃
三〇〇〇	妻	大石　豊子	〃
	従兄弟	渋谷　良雄	〃
〃	妻	佐藤　貞子	〃
二二〇〇	妻	伊沢　ヤス	〃
二〇〇〇	妹	西森サツキ	三〇〇〇
〃	妻	稲村　かつ	二〇〇〇
一〇〇〇		遠藤　芳子	〃
〃	妻	落合　てふ	〃
〃	母	斎藤　リウ	一〇〇〇
〃	妻	中村サダヨ	〃
〃	姉	田沢　廉子	〃
〃	妻	田中トメノ	〃
〃	妻	長島八重子	〃
〃	妻	三村ともよ	〃
五〇〇	妻	井上　イソ	〃
〃	長男	伊藤　重徳	〃
〃	兄	岩瀬　石松	〃
〃	弟	鈴木　孝輔	〃

◇富山県

三〇〇〇	妻	高林　セキ	〃
二〇〇〇	長男	高林　芳夫	〃
〃	兄	青木　謹次	〃
〃	兄	阿部　文吾	〃
一〇〇〇	妻	藤田　ヨリ	〃
〃	妻	渋谷セキノ	〃
〃	妻	松岡　イキ	〃
〃	母	山田　信子	〃
〃	父	安沢　隆平	〃
〃	兄	安中　久雄	〃
〃	姉	鮫島みさを	〃
〃		片桐　さき	〃
〃	母	小出　チヨ	〃
〃	兄	小林　正道	〃
〃	妻	佐藤　フジ	〃
〃	父	高野　仙吉	〃
〃	姉	米田　トシ	〃

◇石川県

二〇〇〇	長男	永井　武弘	〃
〃	妹	吉光　澄子	〃
〃	母	三輪　つげ	〃
一〇〇〇	姉	大島　かの	〃
〃	姉	高畠　芙容	〃

兄　林　庄三　一〇〇〇
妻　宮丸　富美　〃

◇福井県
父　堂東　秀　二〇〇〇
妻　鳥羽　春枝　〃
妻　青木みねを　一〇〇〇
柳沢　清信　〃

◇山梨県
父　黒川　孝平　五〇〇〇
母　志田　かね　一〇〇〇
母　中山　いよ　〃
妻　望月とよ子　〃

◇長野県
妻　伊藤ますの　二〇〇〇
妻　高見沢およう　〃
兄　宮入　貞夫　〃
妹　牛山　光子　一〇〇〇
妻　岡島みね子　〃
長男　神田　環　〃
母　末松すみへ　〃
妻　滝沢　牧江　〃
父　中村　克己　〃
妻　鎌倉さかよ　五〇〇

◇岐阜県
妻　鳥本みさを　三〇〇〇
母　寺沢喜美代　二〇〇〇
山田八重子　〃
兄　渡辺　三三　一〇〇〇

◇静岡県
妻　土屋まさ子　六〇〇〇
母　杉山　きよ　四〇〇〇
父　赤堀弥三郎　三〇〇〇
母　清水　ひさ　〃

二〇〇〇
一〇〇〇

妻　石川　けい　二〇〇〇
母　内海　はつ　一〇〇〇
甥　江藤　高雄　〃
妻　大塚　かね　〃
父　勝又　良蔵　〃
妻　黒田　トシ　〃
妻　伊藤　操子　〃
長男　松枝孝太郎　〃
松下　竜二　〃
兄　前田　市平　〃
女　三浦　染　〃
母　稲村　いと　五〇〇

◇愛知県
妻　川越　コウ　三〇〇〇
兄　伊藤　一二　二二〇〇
妻　山田　あき　〃
母　池山　くわ　一〇〇〇
兄　川村　正一　〃
母　小山内小美賀　〃
兄　柵橋　道広　〃
妻　吉田ひさ子　〃
母　大原　はる　五〇〇

◇三重県
妻　大森　すず　二〇〇〇
妹　荒木　すゑ　一〇〇〇
妹　伊藤　みね　〃
母　千草を志ず　五〇〇

◇滋賀県
妻　松岡　みの　一〇〇〇
妻　正野　きぬ　〃

◇京都府
母　川本ユキエ　三〇〇〇
次女　阿蘇　俊子　二〇〇〇

二〇〇〇
〃

妻　稲積　や江　二〇〇〇
母　小林　サト　〃
妻　中根　杉子　〃
妻　長谷川田鶴　〃
母　柴田　さく　一五〇〇
谷　正文　一〇〇〇
母　古川　たけ　〃

◇大阪府
母　安井　文子　三〇〇〇
妻　吉原　初　〃
妻　堀家かつ江　二〇〇〇
父　栗巣弥市郎　一四〇〇
伊藤　登　一〇〇〇

◇兵庫県
母　枝光　たい　五〇〇〇
父　瀬川　英治　〃
妻　江坂　富子　四〇〇〇
母　清水つちゑ　三〇〇〇
土屋トミエ　〃
妻　友枝カオリ　二〇〇〇
母　林　いち　一五〇〇
妻　山野イクエ　一〇〇〇

◇和歌山県
妻　谷口　たき　一〇〇〇
妻　山中　フジ　〃

◇鳥取県
父　門脇　財重　一〇〇〇

◇岡山県
妻　宇山　アサ　二〇〇〇
妻　中島　清子　一〇〇〇
母　和気　小歌　〃
妻　河合　幸好　五〇〇

◇広島県

一〇〇〇
一五〇〇
一二〇〇
一〇〇〇
〃
〃
〃
〃
〃

◇山口県
妻　内富みつゑ　六〇〇〇
妻　小住　竜　三〇〇〇
妻　島田　チヨ　二〇〇〇
児玉　富子　一〇〇〇
母　原田　ミト　〃
義弟　広田　道男　〃
妻　道源　ヒサ　〃
妻　内田ヤエ子　〃
母　矢次　富　〃

◇徳島県
母　臼井　コト　一〇〇〇
兄　峯野　英男　〃
高橋　清子　五〇〇
父　豊田　民蔵　〃

◇香川県
母　奥田　マス　一〇〇〇
長男　秋山　正清　五〇〇〇
妻　石田　藤美　四〇〇〇
妻　富田トシ子　二〇〇〇
父　久森　俊一　〃
弟　秋山　正興　一〇〇〇
父　上村忠太郎　〃

母　植田　操　一〇〇〇
妻　原　志津枝　一五〇〇
兄　石田　史郎　一二〇〇
母　久保サクノ　一〇〇〇
妻　小林アヤ子　〃
妻　寺内ヤチヨ　〃
父　浜本　米一　〃
母　藤本カメヨ　〃
妻　川西シズコ　五〇〇
妻　大年ユキミ　〃

一〇〇〇	妻	黒川チヨノ
五〇〇	妻	松原ユキエ

◇愛媛県

五〇〇〇	妻	清水　朝美
三〇〇〇	母	三好　勝子
二五〇〇	父	片山　春弐
二〇〇〇	母	松木ミチル
一〇〇〇	母	井原トノヨ
〃	妻	伊藤　梅子
〃	妻	小西アキヨ
〃	母	西　サクノ
〃	母	山岡シゲミ
五〇〇		山本　峯子
〃	兄	渡辺　義雄

◇高知県

一〇〇〇	母	久保久米寿
〃	母	倉本　朝衛
〃	妻	田中　百合
〃	父	馬場　福義
〃	母	山脇　熊野

◇福岡県

一〇六〇〇	妻	広田ヨシ子
九〇〇〇	弟	西原　康雄
四〇〇〇	母	家迫　ソヲ
三〇〇〇	妻	甲斐　光子
〃	姉	川上ミサヲ
〃	兄	樗木孝二郎
〃	母	徳玉　好子
〃	女	深川　芙由
二〇〇〇	母	江崎　ヒモ
〃	母	倉智　トモ
〃	母	倉員ミカノ
〃	母	小林オカツ
二〇〇〇	妻	柴田ヤエ子
〃	妻	下釜　春江
一〇〇〇	父	岩崎関次郎
〃	父	小野　林
〃	母	緒方ミサヲ
〃	母	片山　キク
〃	母	金丸　ハル
〃	妻	近藤シヅエ
〃	父	杉山　柳平
〃	妻	湊　サカエ
〃	母	峯　シマ
五〇〇	妻	佐藤タカノ
〃		命婦はつえ
〃	妻	一瀬クモエ

◇佐賀県

三〇〇〇	弟	岡　茂年
〃	母	宮崎　トモ
二四〇〇	妻	原口　ミヤ
二〇〇〇	妻	石田　トシ
一〇〇〇	母	金子　セノ
〃	母	坂本　トセ
〃	兄	手島　辰己
〃	妻	山田　文子
五〇〇	妻	井手ツギヨ

◇長崎県

八〇〇〇	母	斎藤　ミ子
四〇〇〇		佐木　幸夫
〃	妻	松尾　フサ
三〇〇〇	妻	前田　フサ
二五〇〇		原田千三郎
二〇〇〇	妻	安達シツヨ
〃	母	久村　マキ
〃	妻	平田　利子
一五〇〇	妻	田村サヨ子
一〇〇〇	父	板浦弥一郎
〃	長女	大野美穂子
〃	妻	林　文枝
〃	妹	前原寿美子
〃	妻	福井ヨシ子
〃	妻	福田　音和
五〇〇	母	小林　ミツ
〃	妻	鹿田ミサカ
〃	妻	横山　アヤ

◇熊本県

二〇〇〇	妹	村上佳寿子
〃	父	山部　貢
一〇〇〇	母	荒木ジユカ
〃	妻	今村　コメ
〃	妻	大宮　誠子
〃	妻	塚野ヨシ子
〃	弟	安永　嘉彰
五〇〇	兄	北村　権蔵

◇大分県

四〇〇〇	妹	野田　雅子
二〇〇〇	妻	石塚　文子
一〇〇〇	兄	衛藤　金喜

◇宮崎県

二〇〇〇	母	野別　ヒナ
一〇〇〇	母	杉田ヨシノ
〃	弟	高橋　重美
〃	母	土工あぐり
〃	妻	森　フサエ
〃	妻	山口　ミワ
五〇〇	妻	池田　トミ

◇鹿児島県

三〇〇〇	妻	丹村　静枝
二〇〇〇	妻	徳重ミツネ
〃	長男	和田　芳久
一五〇〇	弟	蜂須賀　俊
一〇〇〇	父	今村市太郎
〃	父	遠藤力之助
〃	妻	川畑ツルエ
〃	妻	神川　カツ
〃	妻	黒岩キミエ
〃	妻	染川トメヨ
〃	母	西方　エイ
〃	妻	森　テル
五〇〇	妻	法元　クニ
〃	父	出花　池栄
〃	父	塗木覚兵衛
〃	妻	平野　ヨネ

◇沖縄県

一六〇〇〇	母	津嘉山シゲ
三〇〇〇	妻	石原　キク
一〇〇〇	妻	上原　キヨ
〃		浦崎　ナエ
〃	甥	宮城　勇
〃	妻	宮城　幸子

振替払込通知票に托して

福岡　吉永　豊次

本年2月6日靖国神社にて30年祭に参列させていただきありがとうございました。環礁嬉しく読ませてもらっております。手にとる度に心新らたに故人と共にご英霊を忍び感無量であります。8ポイントで大変紙面が明るく、読み易く結構なことと存じます。

（49・12・27受）

事務局だより

○新幹事紹介

二月六日の定期総会の際左記二名の会員が新たに幹事に指名されたが全員拍手をもってこれを迎えた。本会更に充実発展のため両氏のご活躍を心から期待する。

埼玉県　土岐　達雄殿
東京都　高林　芳夫殿

○萩原金次郎幹事の赴報

創立当初ハワイでご活躍であった萩原幹事は、同地で自費をもって、寺院において慰霊祭を営まれた。多数名士の御参列を得、なかにハワイ州副知事ジェームス・ケアロア氏の弔詞に感じその後多くの戦争参加の方々から、戦場での遺留品が本会に届けられた。彼我の友好を深める上に大きな功績があった。四年前お送りした環礁が返戻された。今回電話帳を頼りにお尋ねしたところ奥様及び御長男勇一郎様から、同氏が昭和46・8・30滋恵医大附属病院で膀胱炎で永眠されたと知った。本会に対し多大の貢献をいただいたことを深く感謝し、安らかな御冥福を心から御祈り申し上げた。

○マリアナ群島が米国の自治領に

第一次大戦後日本の委任統治となったマリアナ諸島、カロリン諸島及びマーシャル諸島は、第二次大戦後米国の信託統治となって今日に及んだ。

それが6月18日のサイパンからの、UPI通信によると、

『中部太平洋ミクロネシアのサイパン、テニアンなどマリアナ諸島で17日、米国領に入るかどうかを決める住民投票が行われたが、米国自治領になることが確実となった。中間発表では十三投票区のうち過半数の投票区で住民の約80％が賛成票を投じている。

注　自治領とは或国家の領土の一部で、広汎な範囲の自治権を有するもの。（広辞苑より）

○慰霊碑の冒瀆

去る6月19日毎日新聞朝刊都内版に「赤ペンキで落書　摩文仁の丘　無残、慰霊塔32基」という見出しで写真入り四段ぬきの記事があるのが目に入った。

これによると沖縄県糸満市の戦跡公園、摩文仁の丘で18日、第二次大戦沖縄戦で戦死した将兵の霊をなぐさめる各県の慰霊の塔のほとんどが赤ペンキで落書されたという書き出しである。そして参拝者や遺族らは「ひどい」「戦死者を冒瀆するものと泣いたり怒ったり。糸満署は特定セクトの犯行と見て捜査に乗り出した。たまたま沖縄を訪れ、午後3時頃参拝した坂井兵庫県知事も、無残な兵庫県の〃のじぎく（野路菊）の塔〃に「この聖域に眠る若者たちの霊を考えると、心ない行為に言葉も出ない」と言葉もふるえがち。

同霊域事務所はシンナーやサンドペーパーで除去作業にあたったが塗料はなかなか落ちず、19日も作業を続ける。

沖縄県東京事務所に現在沖縄県内にこの種慰霊塔や碑が何基位あるのか伺ったところ全国都道府県のもの45基の外都市町村、学校、部隊等縁故関係のもの233基、計278基。心をこめられお慰めしている。それがこんなにまで冒瀆されたことは我々も全くその気持を解しかねる。

○篤　志

二月六日も近づきました。申訳ございませんが参拝出来そうにもありませんので恐れいりますが宜しくお願い申上げます。ここに五千円同封させて頂きますので、内千円をご厄介ですが靖国神社のサイセン箱に無記名で奉納して下さいませんでしょうか、おたのみ申上げます。

（50・1・6受）

○　東京　松井　信子

いつもいろいろとお世話様になります。昨年は千鳥ケ渕墓苑拝礼式に参列させていただきました。

又昨年はお墓を改修いたしました折、常吉（主人の弟、ウォッゼで戦死）のお骨に代るものとしまして、いつぞや戴きました霊砂をおさめさせていただきました。皆様お体ご大切に。

（50・2・10受）

○会費値上げの提議

会費は年間一〇〇〇円位にしないと運営に行き詰りを生じ、今までの苦労が良い成果にならないと思いますが、ご意見承り度　（50・5・12受）

四十九年度会費より一、〇〇〇円に訂正されています。　事務局

○追想のクェゼリン

前号で紹介の会員松本国雄氏が今月「キナバル三十年」という戦争鎮魂の書を金剛出版社から公にされた。その中の一篇に「追想のクェゼリン」というのがある。同氏実弟の深い想い出にはじまり、本会自らとしては発言を控えた創立から今日までの本会の歩みが50余頁に亘り巧緻な筆で書き綴られている。この点一読をお奨めしたい。内容説明希望の方には本部から送る。

本　部
郵便番号一五四
東京都世田谷区野沢
三丁目十一番三号
マーシャル方面遺族会
電話（東京）四三一―三六一四番